人の国際移動のアーカイブ化：
日系人コミュニティウェブサイト「ディスカバー・ニッケイ」を事例に

東京大学大学院学際情報学府　文化人間情報学コース博士課程
稲葉　あや香

国際移動を経験した集団が、いかにして想像の共同体として集合的記憶を保持、想起しうるのか。本発表の主題は、記憶そのものの内容ではなく、個々の記憶を想起するための媒体の構造である。ローカリティと集合的記憶に関する人類学的な研究を元に、特定の土地に根差さないバーチャルな空間を「記憶の場」と捉え、在外日系人の交流をテーマにしたデジタル・アーカイブ「ディスカバー・ニッケイ」において、利用者が日系人にまつわる集合的記憶をどのように構築、保持しているかを明らかにする。

集合的記憶は、時間との関係で論じられることが一般的である。それに対して、ノラが記憶の場という語により論じたように、記憶生成と想起の方法は、地理空間の構造と密接に関わっている。集合的記憶を扱う文化人類学的研究の中にも、墓の配置や住宅の間取り等の空間を参照することで、家族や親族にまつわる過去を想起する実践が見られる。言い換えれば、地理空間そのものが集合的記憶を蓄積し呼び出すアーカイブとして機能する、という構図を立てることができる。そうであるならば、地理空間上にないデジタル・アーカイブが、記憶の場としてどのような機能を果たすのか、という問いが第１の軸である。

第 2 の軸は、そのような記憶の場論の基盤にあるローカルな共同体像である。概ねそのような記憶の場研究は、国民や集落の住人など、定住的な集団を前提に行われており、各国の移民やその子孫のアーカイブに対しても、国家におけるマイノリティ性が強調された。一方で、人の国際移動への注目が高まるに従い、集合的記憶がローカルな共同体に存在するという構図自体が問題化されるに至った。特に、特定の帰属の地をもたない移動民やディアスポラ、多くの国を跨いで生活するトランスナショナルな移民の自己意識は、国家などの想像の共同体がもつ記憶には回収されない部分がある。しかし、移民や移動者の想起とローカルな土地の役割との関係は、未だ十分に検討されていない。

上記の議論を踏まえ、本研究では全米日系人博物館が運営するデジタル・アーカイブ「Discover Nikkei」を事例として取り上げる。運営者によって「世界中に移住した日系、すなわち日本に先祖を持つ人々のストーリーや、考え方を共有する」場と定義されたこのサイトでは、ユーザー参加型である点が特徴的である。アカウントを作成したユーザーは、サイト上に文章や写真を投稿し、公開やタグ付けを行うことができる。本サイトでは、このユーザーによる投稿が主要な展示物として扱われている。サイトでは、すでに「日系人であることの意味は何か」というマスターナラティブが設定されている。しかしユーザーの投稿は、集合体として共通のエピソードや記憶を生成するわけではない。一ユーザーが日系人としてのルーツを語る中で参照するのは、しばしば家族史などの親密な関係である。それら投稿が、内容を平均化することがなくとも、コメントやタグ等の参照機能により、緩やかに隣接

していることが確認できる。

本発表は、脱空間化された集合的記憶がどのように保持されるのかというディアスポラ研究における論点と、デジタル・アーカイブという展示空間の記憶の場としての性質をめぐる議論とに資するものである。